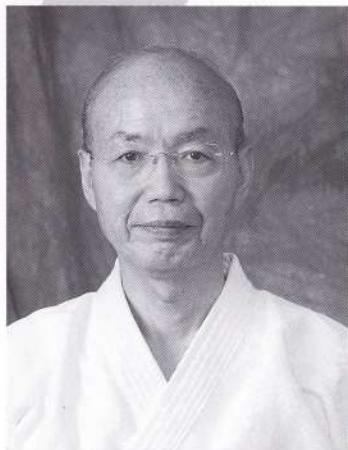


1967年、植芝盛平翁先生大演武大会(柳井)にて。中央開祖、前列右から3人目筆者



# 学び、工夫し、 合気道、 繋ぐ。



八千代合気会 師範

乾 泰夫 (いぬい やすお)

八千代合気会 会長・師範、  
八千代市合気道連盟 会長、  
千葉県合気道連盟 副会長、  
経済産業省合気道部 所属、  
合気道七段  
昭和22年3月20日生 徳島県出身

幼い頃から、いつも武道はそばにあった。導かれるように合気道、そして開祖をはじめとする恩師と出会い、一歩一歩丁寧に合気道の道を歩んできた乾師範。技の体得だけでなく、合気道の精神の理解にも心血を注ぐ、その一途な合気道人生に迫る。

## 「合気道入門まで」

長兄との間に二人早逝し、上は十歳離れた兄だけでした。この兄が柔道を習っていて、柱に帯を巻き付けて打ち込みの練習をしているのを目にして育ちました。父も武道に関心があったのか、千葉周作とサトリの話や、幕末の動乱期に勝海舟が刀の鑿元を紙継りで縛って抜けないようにしていた話などをしてくれました。子供時代の遊びといえば、相撲やチャンバラ、小学校の裁縫室や社務所の畳の部屋での柔道という時代でした。中学生になると、部活で剣道を選ぶ友や、空手や少林寺拳法を習っている者がいて、身近に武道がありました。

昭和四十年に愛媛大学に入学しました。寮生活で、最初の年は自治会活動に忙しくしていましたが、二回生になった時、大学生生活を充実させるために何かサークル活動をしようにと思い立ち、クラスメイトに何をやっているか聞いて回りました。その中に合気道をやっているという者がいたので、「合気道ってどんなことをやるの」と尋ねると、技の説明ではなく、「宇宙の気を臍下丹田ヘイカクに集めて出すんだ」という答えが返ってきました。この言葉に興味を覚え、早速、稽古場所として借りている松山東警察署の柔道場を訪ねました。五月のことでした。

## 「合気道部時代」

合気道部の指導は瀬戸内海を挟んだ山口県支部

から来られていて、沼田敏男支部長や中村克也先生に教えを受けました。昭和三十九年四月に創部の合気道部で、入部当時は幹部が三回生で、この三回生が二代目でした。

稽古は上から強制されることなく、稽古に遅れた時と息が上がった時だけ、反省や休憩のために道場の縁で静座をするという決まりがあるだけでした。

県支部がある柳井市と松山市の間はフェリーで二時間半掛かりましたので、合宿も含めて、直接指導を受けられるのは年間で十日もなかったと思います。それで、吉祥丸先生の「合気道」「合気道技法」「合気道教本」が頼りの稽古でしたが、お蔭で、自分で工夫する習慣が身に付いたのは良かったのではなかったかと思えます。

主将が、稽古の後で必ず短い訓話をしていて、なりましたので、教えるようになってから、私も何か生きたる糧になる話をしようと思つて続けています。

夏休みに郷里に帰った時には、地元徳島県支部の工藤泰助先生に教えて頂きました。

## 「大先生との出会い」

入門した翌年の春休み、昭和四十二年四月九日に翁先生（大先生）が柳井市に来られました。昭和三十九年にベルギーで客死された村重有相（有利）先生のお墓参りのためでした。それで、柳井

市体育館の道場で県支部の方や私達部員に演武を披露して下さいました。大先生が道場にお着きになられ、道場の奥のベニヤ板で仕切られた控室に入られ、そこへ部員が二人ずつ組になって、名前を言つてご挨拶をしましたが、大先生が、「遠い所よくいらつしやう」と皆にお声を掛けて下さいました。支部長から「翁先生の技は神技です」とか「翁先生は、一目で会った人のことが分かる」とお聞きしていましたので、大変緊張し、また、東京から遠路お越し下さったのに、海を渡ったとはいえ、自分は三時間程しか掛かっていないのにと、恐縮したことを憶えています。

演武の時に、「ここ（道場）は多賀の里じゃ。爺が畳の下に宝物を埋めておくので、自分で掘り出しなさい」「合気道は赤玉・白玉じゃ」というお話をして下さいましたが、「多賀の里」が何か分からない程度で、難しいお話はされませんでした。大先生は、人を見てお話をされたのだと思います。

入り身投げ、立技呼吸法から演武が始まりましたが、予想や理解の程度を遥かに超えており、私達が稽古しているものとは異次元のもので、融通無碍むびやくという言葉が頭に浮かびました。帰りのフェリーの中では、「技を掛ける時に翁先生の眼が光っていたね」という話題で持ち切りになりました。この時のことは生涯忘れることが出来ないものとなり、合気道を長く続ける元となっています。

「遠い所よくいらつしやう」の後に続く言葉を考えると、合気道のためになること、世のため人のためになることを期待されていたのではないかと思います。心を引き締めています。

## 「松山支部時代」

就職先が決まり、工藤先生に松山市で働くことが決まったご報告をしたところ、当時、四国に県支部があつたのは高知県と徳島県の二つだけだったので、松山に愛媛県支部を作るよう頑張れと励まして下さいました。

沼田支部長からの勧めもあつて、松山支部を開かれていた松隈勇夫先生に付きましました。国鉄（現、JR四国）松山駅近くの新玉公民館を借りて稽古しましたが、高知県支部から佐柳孝一先生が自家用車で三時間余りかけて松山支部と松山商科大学（現、松山大学）に教えに来られていました。最初のご指導の時、昭和四十四年の五月のことであつたと思います。大先生が四月に亡くなられたことを聞き、大変ショックを受けました。いつか東京に出て、大先生のご指導を受けたいと願っていたことが消えてしまったのです。その時の松山商科大学のキャンパスと空の色が今でも脳裏に浮かびます。仕事に就き、朝八時から夜中まで仕事をする日が続きましたので、公民館で朝稽古をさせて頂くことになり、少しの間でしたが指導を任せられました。

しかし、無理が祟ったのか入院することになり、稽古を中断して会社も四カ月間休みました。

## 「本部道場時代」

退院後、紆余曲折あって東京に転勤がきまりました。こんなことがあるのかと飛び上がるような気持ちでした。

昭和四十七年二月に上京し、通勤途上の道場も当たりでしたが、折角東京まで出て来られたのだからと思い、本部道場に通うことにしました。月曜日の山口清吾先生と金曜日の藤平光一先生の稽古に出るようになりました。東京に出た頃には二段を頂いていましたが、本部道場の帆布表の畳だと、水の上にいるようで、足が滑りました。随分と踏ん張っていたからだと思います。

しかし、長くは続きませんでした。受け身を取ると尾骶骨から脊髄までズンと響くような痛みを覚えるようになったからです。それで、稽古を休んで整体に通いました。

## 「増田先生のご指導」

昭和五十二年になって、会社の近くで稽古をしている所があることを知りました。日本石油でしたが、通産省（現、経産省）も一緒に稽古しているとのこと、これは頼めば入れて貰えるだろうと思い、お願いして稽古に加えて頂きました。本部道場から



2003年、増田誠寿郎先生と

増田誠寿郎先生が指導に見えられていて、毎週、教えを受けることが出来るようになりました。

増田先生のご指導は囁んで含めるようで、ユーモアに富んで楽しいものでした。昼休み中の稽古でしたので、稽古の後で食事をする時などに、大先生の演武を拝見して分からなかったことなど質問しましたが、少しも嫌な顔をされず教えて下さいました。四段を頂いてからのこと、昭和五十八年になって、近くに後輩が引越して来ましたので、二人で稽古をするだけでは勿体ないと思い、同好者を募ることにしました。年齢も三十六歳になっていて、人生の師と仰ぐ方から「人生の半分は世の中にお返しをするように」との教えを受けていたので、この時と思い立った訳です。幸い八千代市市民体育館が空いていて借りることが出来ました。

このことを増田先生にお話ししたところ、毎週の稽古が私のためだけの稽古になりました。「やさしくするように」とのこと、痛くない技を徹底して教えて下さいました。二カ月程、そういった稽古が続きましたので、私も考え方を変えました。後になってから知りましたが、増田先生はこの時、千葉

県下で指導していらっしゃる先生方にご挨拶をして下さり、スムーズに滑り出すことができました。私が考え方も技も変えたら、それまで日石合気道班と一緒に稽古をしていた人から、「乾さん、痛くなくなったよ」と口々に言われるようになり、それまで随分きつい稽古をしていたことを悟ることが出来ました。その時代に相手をして下さった方々には大変申し訳なく思っております。

増田先生が、「道主に代わって稽古します」と仰っていましたので、八千代市では私も増田先生の代わりに稽古指導をさせて頂くことを忘れないようにしております。

## 「八千代市での稽古」

市民体育館で稽古を始めるに当たって、自ら和文タイプで案内状を作成し、自治会の会長さんに頼んで回覧板にチラシを入れて頂きました。十月二十九日に発足してみると大人七名、子供六名の参加があり、幸先良いスタートとなりました。首都圏で働いている後輩が三名駆けつけてくれました。広い道場で、これで思う存分稽古が出来ると思いましたが、昭和五十九年六月に初めて増田先生の審査を受けた時、私の審査をされているように感じ、以後、自分の上達よりも稽古に通って来る人のために良い指導をしようという気持ちに変わりました。指導している時、増田先生から教えら



2010年、八千代市合気道連盟演武大会にて

れたようには出来ないことがあります。技が掛からない時には無理に掛けたり痛くしたりしないで、「もっと研究させて頂きます」と言っています。

最近聞いた話ですが、二代道主が指導されていて、初心者が無理に手を握った時、何としても投げるということはされなかったそうです。受け身を失敗してケガをさせるのを避けるためだそうです。二代道主の手は、掴んでも掴んでいるという感触が得られなかったそうです。その話を聞き、私も増田先生の手を掴んだ時、グラグラして持てなかったことを思い出しましたが、この話から二代道主のように、腕前ではなく配慮ができる人間になろうと思いました。

現在、本部道場の菅原繁先生からご指導を受け

ています。先生は指導者を差し置いて稽古相手に教える人がいたら注意されると聞き、会員にもマナーを共有してもらっています。

## 「大先生の教え」

昭和五十九年に千葉県合気道連盟が結成された時、清野裕三先生に初めてお会いしました。学生時代、合気道新聞に掲載された記事で存じ上げていた方ですので、大変感激しました。会長からは、合気道新聞の続きとして開祖の講話を聞くことが出来ました。

千葉県合気道連盟には、発足時、白光真宏会からの参加がありました。市川市に道場があったからです。それがご縁で、最初の版の『武産合気』という本を手することが出来ました。ところが『合気神髄』もそうですが、日本人なので言葉は読めても意味が分からないのです。村重先生の教えに、「男子たる者、分らないことを三日も分かりませんと言ふようなことで済ませてはならない」というものがあります。それで、これらの本に何が書かれているか探求することにして、日比谷図書館で『霊界物語』を借り、開祖が話されている言葉の意味をノートに書き留めたりしました。このようなことを続けていた時、「愛の情動」という言葉について深く考える日が続き、朝方、夢うつつの中で「万有愛護の心」という声が聞こ

えてきました。このことがあって、平成二十二年から八千代市合気道連盟のブログで大先生の教えを解明する作業を始めました。神示によって出来た武道なので、大先生のお言葉の理解のためにはインスピレーション（又は自得）が必要なのだろうと思うようになったきっかけです。

そして、「言霊ことばたまの妙用」や「気の妙用」の前に、「愛の」を付けたのが大先生の合気道ではないか思うようになりましたが、昭和四十二年に大先生からお聞きした「宝物」を掘り出しつつあったら幸いです。

## 「繋ぐもの」

ご指導いただいた多くの先生方に感謝しております。学びきれない上にまだまだ工夫も足りないと感じていますが、そろそろ次に繋ぐ時期が近づいて来ております。私が受けられた範囲内で次に繋ぐべきものを羅列して、総括に代えさせて頂きます。合気道は生業にせず、仕事の傍らボランティアとして教える。

仕事は早出をし、合気道の稽古の時間を創り出す。それでは動きませんよ、と言って頑張らないで、受け身を取ってあげて動きや力加減を教える。技を教えることは大切だが、それよりも理合を、理合よりも心を磨くことを教える。

合気道だけに没頭せず、家庭を大切にします。